

## 随 想

## フジコー技報第27号によせて

## 人生感意気、功名誰復論

過日、永吉センター長に新技術開発センターをご案内いただいた際、最初に「社訓第1条、常に夢と計画性を持ち人生意気に感ずべし」が、株式会社フジコーの大切な信条であるというお話を伺いました。

この「意気」という言葉には、やり遂げようとする強い気持ちが込められており、覚悟のようなものを感じました。

少し調べてみますと、魏徴（ぎちょう）の詩『述懐』に「人生感意気、功名誰復論（人間というものは意気に感じてこそ動くものだ。功名など誰が問題にするものか。）」とあり、群雄割拠する唐の時代に魏徴が天子の命を受け、まさに函谷関を越え敵地に赴く時の断固たる決意を詠んだものと言われています。

人生意気に感じて人生を切り拓いていくには、魏徴が天子の命を受けたように、共感できる人物との出会いが大切なような気がします。振り返ってみますと、その後の展開に大きな影響を与えた出会いがありましたが、特にインパクトが強かった出会いについて、以下にご紹介させていただきたい思います。

## 関口睦夫先生（九州大学名誉教授）

関口先生は、分子生物学の草分け的存在で、DNA傷害の修復機構の解明で数多くの業績を残されました。

前職（一般財団法人化学物質評価研究機構）の日田研究所で化学物質の安全性試験に取り組み始めた頃、関口先生に分子遺伝学講座で研究員としての

公益財団法人  
福岡県産業・科学技術振興財団  
産学コーディネーター

医学博士 大塚 雅則  
Masanori Ohtsuka



機会を与えていただき、その時の成果を論文（Ohtsuka, M., Y. Nakabeppu and M. Sekiguchi (1985) Ability of various alkylating agents to induce adaptive and SOS responses: A study with *lacZ* fusion. *Mutat. Res.*, 146, 149-154）にできたことは、その後の大きな励みとなりました。

## 神代正道先生（久留米大学名誉教授）

神代先生は、肝臓癌の病理で世界的に著名な病理専門医であり研究者ですが、日田研究所で実験動物を使って発がん物質の短期検出系の手法開発に取り組むことになった際に、RI施設を利用して実験を行う必要があったため、日田研究所から車で1時間の距離にある久留米大学医学部病理学講座に特別研究生として籍を置いて手法開発を進める機会を与えていただいたのが神代教授でした。

この手法開発の過程で何報か論文（Ohtsuka, M., K. Fukuda, H. Yano and M. Kojiro (1998) Immunohistochemical measurement of cell proliferation as replicative DNA synthesis in the liver of male Fischer-344 rats following a single exposure to nongenotoxic hepatocarcinogens and noncarcinogens. *Exp. Toxicol. Pathology*, 50, 13-17.など）を出すことができ、博士（医学）の学位を授与していただきました。

## 伊東信行先生（名古屋市立大学名誉教授）

伊東先生は、発がん物質の同定、発がん性検出の簡易手法の開発、発がんの化学予防など、多岐にわたって化学発がんの基礎的研究に取り組みました。

2001年から東京本部に異動し、独立行政法人新

エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）・委託事業「高精度簡易有害性評価システム開発（DNAマイクロアレイを用いる網羅的遺伝子発現解析手法を応用した新規発がん性予測手法の開発）」のプロジェクトマネージャーとしてプロジェクトの運営・管理を行うこととなりました。

この事業は化学発がんの第一人者である伊東先生をプロジェクト推進委員会の委員長に 5 年間続けましたが、プロジェクトの運営、毎年行った国内外の学会やシンポジウムでのプロジェクト成果の発表などで伊東先生に直接ご指導いただくことができました。

この大型プロジェクトに取り組むなかで、伊東先生から「大塚君は nice guy だ」と言っていただいたことが忘れられません。伊東先生は、大変残念ながら、2010 年にお亡くなりになりました。

これらの先生方は、常に何か目標を定め、前へ前へと進み続けてこられた方々でした。優れた研究業績だけでなく、多くの後進を育てられたことも共通しているようです。

それぞれの先生に出会えたことで、少しは研究マインドを受け継ぐことができたのではないかと思います。この研究マインドこそが、産学コーディネーターの原点でもあると考えています。